

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

④幕開け～最初の1年目

村本 邦子

走りながら考えるタイプの私である。研究所開設にあたって事業計画のようなものはほとんどなかったのだから、最初の1年目、どんなふうに事業を展開したのか、記憶は不確かである。何となく覚えているのは、1990年のおそらく9月だったのだろう、生後3カ月に満たない娘をスナグリ（抱っこバンド）に入れて、近所の不動産に行き、ワンルームマンションを借りる契約をしたこと。学生時代、不動産物件を借りることは何度か経験してきたが、私は、いつも迷わずその場で決めてきた。だいたいのあたりさえつけば、何事もご縁、住めば都と思っているからだ。それではずれたことはない。

この時、ひとつだけ学んだことがある。考えてみれば当然なのかもしれないが、賃貸契約にあたって、現在無職であると言うと不動産屋は警戒し、夫の有無と職業を聞かれて、夫が大学の先生とわかると、途端に安心した様子で相手にしてくれた。離婚

してこれから新しい地で仕事を探そうとしている女性には厳しい状況だろう。「そうか、私はこの社会にあって夫の庇護下にいるのだ」と知り、なんだか軽く侮辱のような、それでいてこそばゆいような変な気分を味わった。何しろ、私は早くから自活しており、自分の健康保険証だって持っていたのだ（この時期は「扶養」だったけど）。

資本金は百万（当時はバブルで敷金も家賃も高かった）。新しく部屋を借り、カーテンや絨毯を選び、家具をコーディネートして自分の空間を創り上げていくプロセスは、いつもワクワク楽しい経験である。今もそうだが、部屋はピンクを基調にした可愛くお洒落な雰囲気。赤ちゃん連れが多いので、絨毯敷きにして、玄関で靴を脱ぐようにした。開業のカウンセリングルームとしてはちょっと変わっているが、今なおこの形で続いている。必然的にアットホームな雰囲気となる。開設パーティもしたはずだが、あまり覚えていない。

記憶は不確かなものの、手掛かりとして年報の活動記録が残されている。急な思いつきで、毎年、年報なるものを発刊することに決め、開設後1年した1991年秋に『女性ライフサイクル研究』創刊号を出版した。雑誌の発行を思いついたのも、趣味で同人誌を出したりしていたからだろう。どんな経験が後にどんな形で役立つかわからないものだ。そして、誰かが言ってくれたのだと思うが、ISSNを取り、国会図書館へも入れるようにした。創刊号の扉にはこんなふうを書いてある。

「とらわれず、こだわらず、かたよらず」
気負わずに自然体で伸びゆく女性を目指したい。FLC研究所はそんな女性を支持します。

という言葉掲げて、FLC研究所を始めて1年が過ぎました。「女の人って大変だなあ。女の人って頑張ってるなあ」と実感するようになってから、女性のために何かしたいという漠然とした思いで、思わず行動が先走りしたようないきさつでした。目に見えない力が女性を縛り、型にはめようとし、また、女性自身もそんな圧力を内に取り込んで自分を押しこめている様子は、あまり幸福そうには見えませんでした。女性が不幸だとすれば、当然男性も不幸なはずでしょう。

開設当初はとりあえず、女性のワークショップ、無料電話相談、個人カウンセリングから始めてみました。やっていくうちに、少しずつやりたいことが見えてきて、スタッフである仲間も増え、できることも拡がりました。ニューズレターの発行、グルー

プカウンセリング、講演企画、産前産後の心の訪問ケア、etc。仲間が増えて力を合わせると、できることに何倍もの広さと深みが増し、そのことに刺激されて、また新たに力が湧きおこるといふ喜びを知りました。それと同時に、複数でやっていくことの難しき、傷つけあったり、すれ違ったりという苦い経験もありました。それでも、やっぱり、仲間っていいなあと感じています。…

末尾の活動報告によれば、開設した1990年10月から、「お母さんのための無料電話相談」と各種ワークショップ（女性学コース、発達心理学0歳・1歳・2歳児コース、マタニティコース）、個人カウンセリング、グループカウンセリング、トークルームを始めている。参加者数の多い企画は、近くにある北区民センターの貸し部屋を借りた。各種ワークショップの参加費は、開設当初から現在に至るまで一人千円である。収益にはならないが、これは、参加者とスタッフの垣根を低くする効果を生んできたと思うし、眼に見えない守りとしての枠組みをいかに作るかというスタッフの訓練に役立ってきたと思う。

客層としては、子育て仲間呼びかけ（前号で紹介したように、ネピア赤ちゃん学の卒業生ネットワークは大きいものだった）、各種企画を毎週のように新聞の広報欄に載せてもらい、ぼつりぼつりとさまざまな企画への参加者は増えていった。そして、趣旨に賛同した参加者から、口コミでカウンセリングにつながる人たちが出てきた。カウンセリングルームが孤立して存在するのではなく、地域へと拡がりをもつ同心円状

に設定された事業の中心にあるという構造は、今なお維持されている形である。

一番楽しかったのは、たぶん女性学のグループだったんじゃないかと思う。前にも紹介したアドリエヌ・リッチ『女から生まれる』（晶文社）を皆で読み合わせ、語り合うという形のグループだったが（この形式のグループは今も続いている）、ほとんどCRグループとして機能していた。CRとはConsciousness Raising（意識覚醒）の略で、定期的に女たちが集まって、毎回、テーマを決め、女として生きてきた自分たちの体験を語り共有しあうグループのことである。1960年代後半、第二波フェミニズム運動が巻き起こるが、CRグループは、この運動の重要なツールとして役割を果たした。女同士の親密で安全なグループのなかで、それまでひとりひとりが胸に秘めてきた体験を明かし、痛み、苦しみ、哀しみ、怒り、喜びを分かち合うなかで、女たちのさまざまな体験が、決して個人的な問題ではなく、社会的・政治的な問題であることに気づく。"The personal is political."だ。

ちなみに、このCRグループのなかで、子ども時代の虐待やインセスト、夫からの暴力やレイプなどの問題が初めて明らかにされ、その結果として、ホットラインやシェルターなど女たちの救援組織が次々と立ち上がり、法律の改善を求めるアドボカシーが盛んに行われるようになったという経緯があった。

リッチの本に添う形で、女であること、産むこと、母であること、妻であること、夫との関係、性、体、セクシャリティなど、さまざまなテーマで自分たちの体験を語り

合い、分かち合い、それぞれに個性的な互いの人生に敬意を払い、女であることの誇りや力を確認し合った。まるで何かに取り憑かれてもしたように、私たちは飽きもせず、毎週、毎週、自分たちの体験を語り合ったような気がする。第二波フェミニズム運動のキーワードであるシスターフッドとエンパワメントの体験だった。もちろん、参加者にはお客さんもいたのだが、現在のスタッフでもある4人のスタッフが最初の1年目にはもう揃っていたので、研究所の最初期にスタッフたちがこのプロセスを経たことは、その後の研究所の基盤づくりとして何物にも代えがたい重要な意味を持っていたのだと思う。

もうひとつ懐かしく思い出すのは、毎週土曜にやっていたスタッフ会議だ。保育所に通っている子どもも、そうでない子どももいたが、土曜はスタッフが全員子連れで集まって、ミーティングを持っていた。0歳から2歳までの子どもたちが総勢6人集まっていたのだから、それはにぎやかなものだった。電話をかけてきた人から、「そちらは保育所なんですか？」と問われたこともあった。お泊りもしたし、キャンプもしたし、学会や遠方のイベントに一緒に行って、必要な時には子どもを見合いっこしながら、旅行もした。毎年クリスマスにはクリスマス会があつて、子どもたちは大人全員からひとつずつプレゼントをもらえたものだ。こんなふうで育ってきたので、私たちの子どもたちは、まるで大家族のような特別な関係にある。今だってそう。たとえば、うちの子どもたちはヒップホップ・ラッパーだが、CDを出せばスタッフや子どもたちが買ってくれ、都合のつ

くライブがあれば、大人も子どもも応援に駆けつけてくれる。

振り返れば、意図せずも、子育てネットワークという大きな力を持っていたためだろう、とくに営業のようなことはしたことがなかったが、口コミで私たちの活動はちょっとした話題を集め、マスコミに取り上げられ、子育てサークルや公的機関の講師として、また、大丸梅田の赤ちゃん展のゲストとして呼ばれ、女性センターのビデオ出演まですることになった。たとえば、1991年1月3日の読売新聞家庭欄には、「子育ての悩みカウンセリング、母3人スタート」というタイトルで大きな写真入りで女性ライフサイクル研究所のことが取り上げられている。私の膝の上には、まだ半年に満たない娘がちょこんと座っている。ビデオ出演というのは、大阪市婦人対策課による『主婦の再就職』という田上時子さんによる作品だった。このビデオには、可愛い子どもたちが登場するし、私たち自身もまだ20代の可愛い盛り(!?)だった。「女性の視点で女性のサポートを」というスタンスは女性たちの共感を生み、子連れで仕事を始めるということにも話題性があったのだと思う。「アグネス・チャンの赤ちゃん論争」というのがあった頃の話だ。

1991年1月に翻訳出版したユング派フェミニストの精神科医ジーン・シノダ・ポーレン『女はみんな女神』（新水社）は、私たちの活動とともに、9月に創刊された『フラウ』という講談社の女性雑誌に数頁にわたって大きく取り上げられた。この本もまた、女性学ワークショップのテキストとして取り上げられ、このグループは現在も続

いているものである。

1月からは季刊でニュースレターを発行するようになり、4月には研究所のパンフレットを作った。この頃の私の構想としては、週1日、開業のカウンセリングをして（始めた頃は開業の方には別の看板を立てていた）、そっちが仕事、子連れでやるのはサークルの延長のようなイメージだったと思う。そちらの方は人手がある方がいいから、一緒にやりたいというスタッフたちを受け入れ、他のスタッフたちも何か仕事をしたければ、この場を利用して、自分の責任の範囲でやってくれたらいいと考えていた。そもそも、私は人と一緒に仕事をするつもりではなかったのだ。一緒に子育てし、学びながら、それぞれに仕事をしたければ助け合っていけばいいんじゃないのというくらいの意識だった。そんな安易さが仇となることは誰の目にも明らかである。すぐに問題として浮かび上がってきたのが、お金と責任の問題である。「そんなことも考えずに始めたの!？」という声があちこちから飛んできそうだが、これが私の愚かしさである。が、愚かだからこそできることだであるのだ。この問題は、繰り返し、繰り返し、話し合うことを通じて、その都度一番良いと思われる形を模索してきたのだが、この話題は次回にしよう。今、ここまで書きながら、研究所の基本的理念やスタンス、構造といったものは、最初の1年目には、ほぼすでに出来上がっていたのだなあと感じている。

